

今月のテーマ マイス

田上市長の 心と手

～自らの思いを皆さんに語るコラム～

あまり聞いたことのない専門的な用語を聞くと、「何だか難しそうだな」とちよつと関心がなくなったり、「自分にはあまり関係のない話だな」と思ったりします。ましてや日本語でないとなればなおさらです。マイス(MICE)もそんな言葉の一つだと思います。

5月号の「広報ながさき」でもお伝えしましたが、マイスはいろいろな団体の全国大会、九州大会や学会、商品展示会やイベントなど、何かの目的のために多くの人が集まる機会の総称です。以前なら「コンベンション」と呼んでいました。

聞き慣れないので、新しいものかというところ、実はそうではありません。マイスは今でも長崎市で数多く開かれています。今年8月にはPTAの全国大会も長崎で開催されます。



長崎で行われたマイスの様子
(日本外科学会・平成20年)

でも、これまでに長崎には3千人、5千人と入るマイス施設がありませんでした。そのためいろいろな大会を誘致できずにいました。私は今、マイスをもっと長崎で開催しやすく

するために、専用の施設を長崎駅の隣接地に整備したいと考えています。

マイスにはさまざまなプラス効果があります。

たとえば今、PTAの全国大会を開くために県内のPTAの皆さんは準備に大忙しです。その中で、PTAは新しい活動にチャレンジし、連携を強め、確実に力をつけています。これは全国大会を開くことによる大きな効果の一つです。同じように、企業の集まりや学会などが開かれると、その分野が進歩し、長崎の活性化につながるだけでなく、世界に貢献することもできます。

宿泊したり、飲食したり、お土産を買ったり、交通機関を利用したり……といった経済波及効果も生まれます。使うお金(観光消費額)は、一般観光客の2倍以上といわれています。パンフレットの印刷や看板作製や弁当調達や……と、関連する仕事の活性化にもつながります。

もちろん、こういった効果は、施設ができさえすれば生まれるというわけではありません。誘致活動から、大会運営、会議終了後の飲食や観光まで、快適で言はれるまちになるためのさまざまな努力が必要です。関係する産業の皆さんや施設の運営会社はもとより、行政、経済界、大学、市民も一緒に頑張って、オール長崎で取り組むことが大切です。

それは長崎が、交流のまちとして、もっともっとレベルアップしていくきっかけになると思います。

長崎市は25年後には、今より10万人も人口が減ると予測されています。日本全体も人口減少の時代に入っています。国内観光客や修学旅行だけではなく、パイはだんだん小さくなっていきます。

幸いなことに、交流で栄えてきたまち長崎には、外国人や関西地方からの観光客やマイス参加者など、まだまだ「お客様」を増やすノビシロがあります。2つの世界遺産候補をはじめ、磨けば光る財産もあります。市の財政も、これまでの努力の結果、一定の投資ができる状況になりました。この機会を生かし、しっかりと次の時代に向けた備えをしたいと思っています。



疲れを癒やしてくれる公園からの眺め



ときどき振り返って港を眺めながら神社へ上る



「お栄さんの道」の碑が出迎えてくれる



港を望む
大鳥町界隈

幕末から、ロシアの艦隊が停泊した長崎港。ロシア人ではなかった稲佐地区を散策する。

「旭町棧橋前」バス停から徒歩約5分、烏岩神社に続く上り口には「お栄さんの道」の碑がある。ロシア語を話し、持ち前の社交性で将校たちをもてなした「稲佐お栄」(本名道永エイ)。国際親善に尽くした彼女のことを、将校たちは「日本の母」と讃えた。

階段を10分ほど上り、神社へ。手前には当時、エイの居宅があった。ここ辺りからも海を眺めていたに違いない。階段を上って疲れたら、神社の前の公園で一息入れば。広がる港の風景は、視力が失われる病を患ったドラマの主人公が、最後に見た故郷の景色として紹介された。今も昔も、港を望む、すてきな場所だ。